

《史料紹介》

慶長七年五月吉日付『伊勢太神宮御材木之帳』について

——十七世紀初頭尾州・江州をめぐる伊勢御師榎倉家の活動に関する一史料——

千 枝 大 志

一 はじめに——『伊勢太神宮御材木之帳』の概要——

本稿で紹介するのは、慶長七年（一六〇二）五月吉日付の『伊勢太神宮御材木之帳』と題する榎倉修理進なる人物の自筆の冊子である。^①寛政二年（一七九〇）正月に彼の後裔にあたる榎倉修理進武幹が「尾張国丹羽郡岩倉村神明宮再興願之私記 誠意録」と内題を付して、尾張国丹羽郡岩倉村中市場（現・愛知県岩倉市中本町）の神明太一宮（現・神明大社）再興の目的のため「名護屋旅館」において「謹書」した由緒書^②の史料『慶長七年自十一月 神明太一宮御由緒并二伊勢神宮荒木田神主履歴書』（以降、『誠意録』と略記^③）所収の「榎倉氏系譜」によれば榎倉修理進の実名は「武孝」という。榎倉武孝は伊勢御師（以降、御師と略

記）であり「慶長十五庚戌年五月三日」に卒去している（享年六十七歳）。

御師とは、全国各地に存在する自己の檀那（檀家）に対して伊勢神宮（内宮・外宮）の御祓大麻や土産等を配布することで伊勢信仰を広めかつ、伊勢参詣を勧誘・斡旋し、伊勢参宮客を両宮門前町宇治山田（現・三重県伊勢市）で営む旅館へ宿泊させることを生業とする一種のコンシェルジュ的旅行者業者である。また彼らは御師としての仕事のみならず、祈祷執行・神楽奏上等を行う伊勢神宮神職とを兼業した存在でもあった。^③御師と檀那との間には、師檀関係という一種の専属契約が成立し、各地にはその縄張りである檀那の居住地域である檀那所が形成された。全国の檀那は御師に伊勢神宮へ武運長久や五穀豊穰等の祈祷等を依頼

し、その対価として御師のもとには神馬料や神楽料、また初穂料といった名目で極めて多くの金品が集積した。御師にとつて檀那（所）は、生業面での死活問題に関わるものであり、不動産と同等か、それ以上に重視される家産として認識されたため、師檀関係は、一旦締結をみると余程のことがない限り解消されなかった。そのため中世後期には永続性の強い利権として株化し売買対象にもなった。

今回紹介する冊子も、表紙に「伊勢太神宮御材木之帳」と外題があるように、神明太一宮の造営用材寄進帳の記載や檀那等からの造営金品寄進帳の記載が存在するなど、慶長期までの御師関係の冊子史料として他に類例を見ない特徴を複数有しており貴重な冊子といえる。^④

筆者の榎倉武孝は外宮側の御師であるが、そもそも榎倉家は、外宮門前町山田上中之郷に拠点を構えた荒木田姓を有する一族である。^⑤一族内には自治組織山田三方に参画する三方家に列する家格に属する家もある等、中世後期からの宇治山田きつての名族である。武孝は、『誠意録』所収「榎倉氏系譜」から三方家に列する榎倉大夫本家出身の人物と判断できる（その後、彼を祖として分家の榎倉修理家（上中之郷町年寄家）が創設されたという）。

しかし、明治初年の御師制度廃止等により、中近世移行期までの榎倉家関連史料、特に原文書については纏まったものがほぼ皆無であるため、同家の存在形態が今一つ明瞭にならない研究段階にある。特に従来は、榎倉家に直接関わる御祓大麻の配札名簿『御祓賦帳』や、伊勢参宮

者の宿泊名簿『参宮人帳』といった冊子史料は現存が全く確認できず、同家の檀那（所）の構造解明はほとんど不可能な状況であった。

そのため、今回確認された『伊勢太神宮御材木之帳』は、榎倉家の檀那（所）構造に関する研究上の課題を一定程度克服し得る貴重な史料的価値を有する。そのみならず、同冊子は表紙に「岩倉郷」と記されているように、記載された地名の多くが尾張国内の地名であるため、現時点でも実態不明な中近世移行期までの同国内での御師の活動や伊勢信仰の普及状況について、とりわけ松平忠吉領の様相が判明する点で貴重な存在なのである。^⑥

それにも関わらず、『伊勢太神宮御材木之帳』を用いた研究は、同冊子の全文翻刻が現在までなかったこともあり、現岩倉市域内の伊勢信仰受容史論や現地名のルーツ論といった地域史的な研究を除けば、^⑦ほぼ存在しない。故に本稿は、そのような研究史上の問題点を克服する一助となるべく、『伊勢太神宮御材木之帳』全体を紹介する意図を有している。

二 ①〈神明太一宮造営用材寄進帳〉的記載

前章で、『伊勢太神宮御材木之帳』を翻刻紹介する意義を述べたが、本章より記載内容をさらに検討する。この冊子を概観すると内容的には、①〈神明太一宮造営用材寄進帳〉、②〈神明太一宮造営金品寄進帳〉①（〈江州佐和山〉）②（〈尾州丹羽郡〉）とに大別できるため、まずは①

を中心みていく。

同冊子の冒頭から、岩倉郷及びその周辺の計十三箇所（上野村（神野）、石仏、加納・満庭、三淵・井上、八剣・塚越、曾本、岩倉郷惣中、長瀬村・大円寺・小木市場、大地村・川井村、北嶋村・野江（野依）、曾野・羽年（羽根）・太山寺・いなり（稲荷）、長桜・小々所（御供所）、やすら（安良・ならせ（奈良子）、郡（小折）左右郷）より神明太一宮の造営用材が計十四本寄進されたことが記されている。⁸ 榎倉修理進が直接関与する神明太一宮の御用材の寄進であることからすると、この十三箇所が同家の岩倉郷及びその周辺における檀那所の中心であったと推測できる。そして、同家が岩倉郷での廻檀活動の拠点であり、所謂（伊勢屋敷）として機能したと考えられる。

『誠意録』によると、榎倉武幹は『伊勢太神宮御材木之帳』に載る各村のうち、「従往古今ニ至修理進祈祷相納付」し、寛政二年（一七九〇）時点まで檀那所の拠点として機能する村々として「石仏村 加納満庭村 井之上村 八剣村 曾本村 岩倉村 大地村 曾野村 大山寺村 長桜村」の計十箇所を書き上げている。さらに同十箇所は「持伝祈祷所ノ村之外村々岩倉村之近隣ナルヘシ」と推定した上で、『伊勢太神宮御材木之帳』掲載の諸村には岩倉村近郊も含まれると指摘し、それら十箇所は慶長七年（一六〇二）時点での計十三箇所とは異なる地域構成であると認識している。よって、武幹が述べる通り、榎倉修理家が慶長七年以来「持伝」えてきた「祈祷所ノ村」は、寛政二年時点でも基本

的には同家の主要な檀那所なのである。

では実際、檀那所の規模はどの程度であったのだろうか。史料不足のため同年時点での檀那数は不明ながらも、十八世紀後半段階での榎倉修理家の尾張国内全体の檀那数は明らかにできる。『安永六年外宮師職諸国旦那方家数改竄』⁹によると、安永六年（一七七七）時点で榎倉修理家（御祓銘は榎倉修理進、家格は町年寄家）は、檀那所として計一万四千四百四十二軒の檀那（内訳は、江戸が六千九百十二軒、尾州が二千三百八軒、勢州が四百六十八軒、紀州が五百軒、濃州が三百軒、その他が三千六百五十四軒）を有し、他に計五家（冷泉殿、松平豊前守殿、松平備前守殿、中根大隅守殿、三枝備中守殿）の公家や武家の檀那を有している。「榎倉氏系譜」によると、同年時の榎倉修理家の当主は六代目の武幹が該当する。同年時点で、同家が有する尾張国の檀那数は二千三百八軒だが、他に同国を主要檀那所とする榎倉一族は、檀那数二千八百五十五軒の榎倉軀負（御祓銘は榎倉修理進と老沼大夫）、すなわち榎倉本家（家格は三方家）のみである。

以上、寛政二年時点での榎倉修理家の十箇村内の檀那所の規模を考えると、安永六年時で榎倉本家と同様に檀那数が二千軒代であったとすれば、寛政二年時は二千軒程度の規模だったのではないだろうか。

さらに、慶長七年時点の檀那の規模を把握したいところだが、現状では檀那数が判明する統計的史料は存在しない。ただ、『誠意録』には、

尾州丹羽郡岩倉村伊勢町諸役令免許訖

并山林竹木等不可剪取者也仍如件

慶長七年

十一月廿三日（朱印）

榎倉修理進殿

と、慶長七年十一月二十三日付の松平忠吉の朱印状写が所収されており、榎倉武孝は岩倉村内の伊勢町の諸役免許や山林竹木伐採禁止特権を松平忠吉より得ていることがわかる。

『誠意録』に「尾張国丹羽郡岩倉村伊勢町神明太一宮 慶長七壬寅年ヨリ御心願ニテ同年御宮成就松平薩摩守様忠吉公当国清須在城之時御造宮御草創也」とあるように、神明太一宮は松平忠吉の「御心願」により慶長十年に建立されているが、同宮建立の由緒を語る際、同朱印状の内容も踏まえ、鎮座地の中市場は伊勢町と記される。そのため、この朱印状写にみえる伊勢町は、神明太一宮の鎮座地（中市場）を含む周辺部の地名であると判断できる。¹¹ このように、慶長初年時点で恒久的な伊勢信仰の拠点に相応しい町名が成立するほどの町場が形成していたことは興味深い。

また、『誠意録』には「尾張国丹羽郡岩倉村伊勢町神明太一宮御棟札写」として、神明太一宮に伝わる清須城主松平「忠吉」と犬山城主「小笠原和泉守」吉次が祈願主となった慶長十年（一六〇五）十月十日付の棟札二枚の写しが紹介されるがこれらは現存する。¹² 松平忠吉の棟札は、忠吉朱印状と『伊勢太神宮御材木之帳』、さらに『誠意録』内の由緒を

踏まえると、松平忠吉の発願等を契機に慶長七年五月から神明太一宮の造営をめぐる一連の普請事業が開始され、その三年後の同十年十月十日に造営が完成したことを示す貴重な存在である。

くわえて、徳川家康の命により松平忠吉の付家老となり、犬山城主となった小笠原吉次が願主の棟札も忠吉の棟札と同日付で作成されたことも注目できる。吉次は松平忠吉の筆頭家老であるから、彼が願主となった棟札が作成されたとしても何ら不思議ではない。ただ、後述するように、小笠原家の御師は榎倉家であるため、小笠原吉次と榎倉武孝は関係があったと推測できる。つまり、そのような両者の師檀関係があったために棟札が作成されたのではないかと考えられるのである。

そもそも、榎倉家の尾州での活動時期をみると、伊勢の古文書集『輯古帖』所収の二通の譲状写より十六世紀代から確認できる。すなわち、天文十五年（一五四六）五月吉日付の「榎倉（修理進）武棟譲状」¹³に「一、尾張道者持分一円 同上分共二」とあるように譲渡物件としての尾州の檀那がみえ、また、「一、信濃府中小笠原殿 御同名中 御神領共二」とあるように、檀那として的小笠原家と同家から寄進された神領に関する譲渡のことも記されている。

さらに、文禄四年（一五九五）七月九日付の「榎倉修理進譲状案」¹⁴でも、「一、おわりの国御旦那衆」をはじめ、尾張以外の全国（四国・京・大坂・越前・遠江・三河）に点在した「おわり衆」が確認でき、また、「一、小笠原殿 但神領貳貫者、我等様々御奉公御陣御札仕候故、被

下候旨無紛事」とあり、尾州関連の檀那と、檀那としての小笠原家等の譲渡の記述がみえる。このように、榎倉（修理進）家は、少なくとも天文十五年には尾州関係の檀那と、檀那としての小笠原一門について榎倉一族が相伝すべき大切な家産として認識している。そしてそれは、例えば、安永六年（一七七七）の榎倉頼負の檀那として小笠原一門が記されていることから（『安永六年外宮師職諸国旦那方家数改覚』）、江戸期に至っても継続していたと考えられる。

以上のように、榎倉家と小笠原一門との間に強固な師檀関係が締結されていたことを確認した上で、小笠原吉次の棟札の問題に帰ると、松平忠吉が祈願主で、かつ榎倉（修理進）家との関係が深い神明太一宮の造営に際し、吉次自らが祈願主である旨の墨書がある棟札が作成されたと推測できる。

さらに、『賜廬文庫文書』所収の『榎倉文書』なる榎倉家伝来古文書集の影写本には十一月二十二日付の「丹羽長家書状」¹⁵と、文禄三年（一五九四）十二月十一日付で「丹羽平大夫長休」が作成した「伊勢神宮領目録」¹⁶という丹羽家関連史料二通が所収されている。彼らは丹羽長秀と同族の可能性が高いため、榎倉家の檀那所としての尾州内の史料と位置づけできる。

このように、当該期の榎倉修理家は松平忠吉や小笠原吉次をはじめとする尾張国内の有力者と緊密な繋がりがあった。特に松平忠吉は、神明太一宮造営のことを含む岩倉やその周辺における榎倉修理家の諸活動を

保護していることから考えると、同家の檀那所の規模は最大で松平忠吉領としての尾張国全域に及んでいた可能性も想定できよう。

三 ②〈神明太一宮造営金品寄進帳〉的記載——尾州と江州の軍事拠点をめぐる人的ネットワーク——

前章では、『伊勢太神宮御材木之帳』に記された内容、特に①の内容を『誠意録』の内容と照合することで検討を加えた。本章でも同様の手法で、②について、(1)〈江州佐和山〉、(2)〈尾州丹羽郡〉の順に具体的に検討する。だがその前に、②は①の部分とそもそも関連するののかという根本的な問題を解決しておきたい。

『伊勢太神宮御材木之帳』の表紙には「慶長七年壬寅五月吉日」とあることから、①には慶長七年（一六〇二）五月の内容が記されている。

①と②は同一冊子内ではほぼ連続的に記載されているため、基本的には関連性があるとみるのが妥当であるが、②の(2)は、①と同様、岩倉やその周辺部の榎倉修理家の檀那からの贈答行為を記した内容が大半であり、しかも判明する日付は慶長七寅年の六月六日から同十七日までの間である。とすれば、②の(2)に記された贈答記事は、同年五月に開始した神明太一宮造営用材の寄進と関連付けて理解する必要がある。

つまり、②の(2)は、岩倉やその周辺部における榎倉修理家の檀那からの神明太一宮造営関連の金品寄進に関わる内容が大半であると判断でき

る。さらに②の(2)が、榎倉修理家の尾州の檀那からの神明太一宮造営関連の金品寄進に関わる内容であるならば、それに基本的に近似した記載方式である②の(1)も、そのほとんどが檀那からの神明太一宮の造営関連の金品寄進記事と考えられる。

以上の検討から、②は基本的には①に関連する檀那からの神明太一宮の造営関連の金品寄進記事が大半であると判断できるのである。

(1) 井伊家臣を主とする江州佐和山の檀那からの寄進

早速、①を検討するため、『伊勢太神宮御材木之帳』内の「さわ山之分」と纏められて記された箇所（特に同冊子の翻刻文部分の①）に注目する。実はこの箇所には、近江国坂田郡佐和山（現・滋賀県彦根市）の人物、とりわけ井伊家臣団に属する檀那等の記載が含まれていると考えられる。

何故ならば、『誠意録』に「サワ山澤山ニシテ井伊家領地セル所井野ハ井伊ニシテ井野右近様井伊右近大夫直勝公ナルヘシ直勝公ハ井伊兵部大輔直政公御嫡男直勝公御妹子薩摩守忠吉公之御簾中ト成セ給フ井野掃部様ト有ハ井伊掃部頭直孝公ナルヘシ此直勝公直孝ハ忠吉公御簾中之御兄弟ニ有セ給フ井伊家ハ本国遠州ニテ尾張ヘ御在府之時修理進祈禱之御祓御麻ヲ忠吉公ヲ初メ奉リ御簾中同御兄弟御方々ヘ献シ奉シハ忠吉公之御懇命ヲ蒙リ岩倉神明太一宮称宜職ニ任シ奈モ岩倉村伊勢町諸役御免許山林竹木剪取可カラサルトノ御朱印頂戴シ奉シコト神職之冥加ニ時ニ有

カタキコト申モ餘リ有リ井伊家臣中村氏今村氏三浦氏水野氏山中氏田原氏之姓近臣大身之武士ニ有テ御家老職御用人方々ノ姓氏ニ見ヘタリ井伊掃部頭様ヘハ何条之故アリシヤ当時ハ御祈禱御祓麻進上致サス候ヘトモ今以テ御家中百軒斗祈禱修シ遣シ候」とあるように、①の一部等についての言及があるからである。

すなわち、著者の榎倉武幹は、同冊子にみえる「さわ山之分」が慶長七年（一六〇二）時点で井伊家が入城していた佐和山城のある江州佐和山を指し、さらに「井野」姓の二名（「井野右近さま」・「井野かもん殿」）は井伊家、「中村」・「今村」・「三うら」・「水野」・「山中」・「たん原」の各姓を持つ人物は井伊家臣（中村・今村・三浦・水野・山中・田原）と推定している。『誠意録』自体は、神明太一宮再興関連の由緒が記された史料であるため、史料性格から内容面で検証すべき点もあるが、少なくとも『伊勢太神宮御材木之帳』をめぐる内容については、良質な史料に基づき叙述されているため信憑性が高い。井伊家臣について、の榎倉武幹の見解も、「今以テ」、つまり寛政二年（一七九〇）時点でも「御家中百軒斗祈禱修シ遣シ」、すなわち檀那として祈禱を執行していることや、榎倉修理家は井伊掃部頭へ御祓大麻を進上していないことを述べるといった、脚色の少ない正確な武幹の叙述姿勢が垣間見え卓見というべき記述である。

確かに彼の指摘通り、同冊子内にみえる佐和山を本拠とする有姓者で「三うら十左衛門殿」と「三うら五ん大夫殿」、また「今村小兵へ殿」、

さらに「中村加兵へ殿」は、慶長七年の佐和山藩井伊家分限帳「今寅年分限帳」等を所収する『井伊年譜』¹⁷にも「三浦十左衛門安久」と「三浦権大夫高正」、「今村小兵衛正躬」と「中村加兵衛」とほぼ同一の名乗りの人物が確認できる。また、『伊勢太神宮御材木之帳』にみえる人物（水野・山中・加々爪）と同姓の人物は『井伊年譜』でも複数確認できる。

さらに、正徳期から安永六年までの間（一七一〇―一七七七）で井伊掃部頭を檀那としていたのは外宮御師の松田長大夫であるから、例えば、寛政二年時点でも榎倉修理家は井伊掃部頭家と師檀関係が無いため御祓大麻を進上できない。もし遡って、慶長七年時点でも井伊掃部頭の御師が松田長大夫家であるならば、正式には、榎倉修理進（武孝）は御祓大麻を進上できないため、武幹の記述を裏付けることになる。

ところで、『伊勢太神宮御材木之帳』の②の内容は、基本的には①に関連する檀那からの神明太一宮の造営関連の金品寄進記事が記されていると先程言及したが、どうしてそのように判断できるのか。とりわけ、②の(2)には、御師関連の冊子史料として代表的な『御祓賦帳』と同様、御師側の主要贈答品である伊勢土産（白物・布海苔・熨斗・鯉節・櫛）の記載がみえるため、一見すると『御祓賦帳』的記述と評価できそうである。¹⁹

しかし、『伊勢太神宮御材木之帳』内においては、御師からの授与品である千度祓・剣先祓等といった御祓大麻に関する記述は一切確認でき

ない。そのため、同冊子は榎倉修理家の配札活動に伴い作成された『御祓賦帳』のような存在ではないことは明らかである。

以上を勘案すると、やはり②は基本的には、神明太一宮造営に係る金品寄進の記述であると判断できるのであり、そのように考えれば、榎倉修理家の檀那ではない井伊家の名前があっても不思議ではない。つまり、井伊（右近・掃部）家は榎倉修理家の檀那である井伊家臣団と共に神明太一宮造営料を榎倉修理家に寄進していたと理解できる。しかし、それでも何故「井野」姓で記されたのかは不明であると言わざるを得ない。

ともあれ、現時点で井伊家の問題は若干の問題が未解決ながらも、井伊家臣団からの寄進受納は事実であり、榎倉武幹の推定を裏付けている。

つまり、「さわ山之分」から始まる項目には、江州佐和山の榎倉修理家の檀家（但し、井野家、すなわち井伊家のみ非檀家か）が記されており（翻刻文に❶のある人物）、榎倉武孝は、佐和山の彼らに伊勢土産（白物・布海苔・熨斗・鯉節・櫛）を配布しつつ神明太一宮造営料の寄進を求め、それに応じた人々が金品（銭・銭・米・帷子）を贈答していたことが記されていると判断できるのである。²⁰

(2) 尾州丹羽郡内の檀家からの寄進

ここでは(2)の内容を検討したい。(1)と同様、基本的には『伊勢太神宮

『御材木之帳』にみえる地名は榎倉修理家の檀那所、人名は檀那という理解でよい。まずは地名を検討すると、特に、(1)にみえる御用材の寄進地名と一致（ないし一致しなくても地域的に一致）する地名、また、岩倉といった尾州丹羽郡内やさらに近隣郡内の地名は榎倉家の檀那所であることは確実である。そのような見方をするとき少なくとも計二十二箇所の地名（岩倉・下市場・長瀬・小木市・神野・小牧（小牧西下）・岩倉市・大円寺・清須・川井・石仏・楽田・野依・小折・上野村・天道・畑中・馬場・熊之庄・吾鬘・戸荊・小口）が確認できる。⁽²¹⁾ ここで注目できるのは複数の市場地名である。市場地名が存在する地域は経済的な優位性を有することが窺える。特に『伊勢太神宮御材木之帳』等の榎倉家の檀那所としての尾張国内における慶長七年から同十三年まで（一六〇二～一六〇八）の史料において岩倉では複数の市場地名（下市場・中市場・小木市場・岩倉市）が確認できるが、岩倉自体はいうまでもなく旧城下町であった。⁽²²⁾ つまりこれは、岩倉城が永禄二年（一五五九）に織田信長に攻められ廃城になった後の慶長期でも岩倉には複数の市場地名が確認できるため、求心的な都市経済機能が残っていた可能性が高いことを示している。また、軍事拠点に関わると思われる小牧と清須、さらに小口や楽田、そして小折等の地名が確認できることも注目できる。

小牧は、織田信長が永禄十年（一五六七）に小牧山城から濃州の岐阜城へと本拠を移したことにより、家臣団はもとより小牧山城下町の工業者の多くも小牧の地を離れたが、城下町西部には小規模な町場が、元

和九年（一六二三）から開始する木曾街道の整備に伴う小牧宿の原型地域へ移転するまで存続していた。⁽²³⁾ そのため、「小ま木にしのしも」の記述は「小牧西の下」と解釈できる。いずれにしても、小牧山城下町西部にできた町場の住人と榎倉武孝は関係があったと判断できる。さらに『伊勢太神宮御材木之帳』では、武孝への寄進（木綿一反）を希望する「八郎左衛門」とその「むすめ」の取次役を行う「小まき孫右衛門尉」なる小牧在住者が確認できるが、名乗等からすれば有力者である可能性がある。

清須については、同冊子では「きよす」の「長助」よりの奉贄品の木綿一反を受納したことが記されるだけではあるが、既述したように慶長七年時点で榎倉武孝は朱印状等を介して清須城主松平忠吉と接点がある。恐らく長助は、清須在住の檀家であろうから、この事例は、清須城下町にも榎倉修理家の檀家が複数存在し、武孝は彼らを通じて、清須城下町との人的ネットワークを構築していたことの微証と捉えられよう。⁽²⁴⁾

小口と楽田は、小牧・長久手の戦には羽柴秀吉が、それぞれ羽黒と共に付城を構えた軍事拠点であった。同様に、小折は生駒家屋敷として知られる小折城が築かれた軍事拠点である。ただ残念ながら同冊子では、いずれの地域も記載内容が淡泊であるためその大半は寄進者等の情報が見出せる程度である。

それに加え、榎倉（修理）家は小笠原一門の御師であるため、榎倉武孝は小笠原吉次と師檀関係にあった可能性は先述した通りである。その

推測が正しければ、吉次は犬山城主であるから、武孝は岩倉の神明太一宮の問題を通じて、犬山城下町とも人的ネットワークがあった人物とみることもできるかもしれない。

次に人名を検討する。まずは有力者と思われる有姓者を検出すると、計十二名（柴田又十郎殿・水野善二郎殿・柴山五郎左衛門尉・小河新左衛門・中河助右衛門・井上三四郎殿・大円寺彦左衛門尉殿・小まき孫右衛門尉・小川殿・まんは与吉殿・北しま殿・大嶋）確認できる。⁽²⁶⁾ 彼らのなかで居住地が判明するのは、計十名（柴田又十郎と水野善二郎は岩倉下市場、岩倉衆と呼ばれた柴山五郎左衛門尉と小河新左衛門と中河助右衛門は岩倉、井上三四郎は岩倉市、大円寺彦左衛門尉は大円寺、小まき孫右衛門尉は小牧、まんは与吉は満庭、北しま殿は北嶋⁽²⁶⁾）である。特に、柴田又十郎は「はしめてたんな也」と注記があるように慶長七年に榎倉修理家の檀那になったとあることが注目できる。すなわちここから、榎倉家にとって岩倉は、十七世紀初頭に至っても新規に檀那を獲得し得る地域であったと榎倉修理進側から理解されていた可能性が読み取れよう。

また、有姓者の分布をみると岩倉在住者が多く、岩倉は有力者が多数居住する地域であり、それは岩倉衆というグループ呼称からも窺える（石仏衆が確認できる石仏も同様か）。ここからも、岩倉が都市性を岩倉城廃城後も維持していることが窺える。ただ、慶長七年時点では既に岩倉は城下町としての機能は喪失しているため、彼らは武士である可能性

は低く商工業者と思われる。特に岩倉下市場の柴田又十郎と水野善二郎、岩倉市の井上三四郎は、市場地区に住む有姓者であることから有力商人の可能性が高い。

商工業者といえば、それを彷彿させる屋号を持つ者が計二名（かしや・はかりや）確認される。鍛冶屋は岩倉、秤屋は小折に居を構えており、両地域の商工業者の存在を示す事例といえよう。鍛冶屋は、榎倉家に「「」なかな」と「ひはし」を贈答しているが恐らく自ら製作した刀と火箸であろう。秤屋はその名から計量業を営んでいたと思われるが、特に『伊勢太神宮御材木之帳』内では銀取引が散見できるように、計数貨幣である銀貨の両替等の取引では計量行為が伴うため、小折の秤屋は、銀貨といった金属貨幣の取引業務を行っていたのかもしれない。⁽²⁷⁾ なお、同冊子内には複数の金属加工品（刀・火箸・包丁・脇差・鏡）が確認できる。

続いて、『伊勢太神宮御材木之帳』で多数確認できる無姓者について検討しよう。一見すると、姓が無いということで経済面や身分面で低い存在であるかのように思われるが、『誠意録』掲載の次の史料をも用いることで必ずしもそうとは言い切れない場合も存在することがわかる。

大神宮様御田

南ノかわ

西ノ口

一 壱段歩 喜右衛門 弁^(マ)

御年貢六斗式升 口米なし

中市場浦屋敷

一 一畝拾三步 甚右衛門 弁

御年貢一斗五合 同

中市場浦屋敷

一 三畝貳拾歩 六介 弁

御年貢貳斗七升五合 口米なし

以上合納壹石者

右之御田御屋敷猶永代二相違御座有間敷候

為後日之御書付進上仕候仍如件

慶長拾三年申つちのへ

極月十一日 忠右衛門 書判

孫右衛門 書判

榎倉修理進様 次郎右衛門 書判

彦左衛門 書判

喜右衛門 書判

弥 宗 書判

喜左衛門 書判

尾州丹羽郡岩倉村

これは慶長十三年（一六〇八）十二月十一日付で、岩倉村の忠右衛門他計七名が榎倉修理進に田所屋敷を寄進したことを示す文書の写しであ

る。⁽²⁸⁾ 屋敷の在所に中市場が含まれていることから、計三箇所の屋敷は神明太一宮周辺に存在したと考えられる。年貢納高は計一石であり、各年貢は三名の百姓（西ノ口喜右衛門・甚右衛門・六介）が供出することになっている。そのため、「書判」、すなわち花押を据える忠右衛門他計七名は、岩倉村の庄屋的な役割を担う存在であると推測できる。実は、そのうち四名（次郎右衛門・喜右衛門・孫右衛門・喜左衛門）は『伊勢太神宮御材木之帳』内でも確認できる（翻刻文に②のある人物）。彼らは榎倉修理家へ「わた」や「はな」を贈答している。

同冊子内では、彼ら以外にも「わた」や「はな」を贈答品に選んでいる者は多いが、他にも「もめん」・「布」・「同（もめん）布」といった繊維関連の贈答品が散見できる。そのため、四名が贈答した「わた」は木綿、「はな」は綿花と判断できよう。

そもそも木綿は、国産品の生産が開始したのは十五世紀末になってからといわれ、十六世紀初期には三河木綿や伊勢木綿、摂津木綿といったような国産木綿が確認できる。⁽²⁹⁾ 尾張国内では十九世紀代を中心に知多地方や尾西地方が主要綿作地として知られている。従来、史料不足のため、十七世紀初頭時点での尾西地方を含む尾張国西北部における木綿生産については不明な点が多かった。

しかし本稿での検討により、『伊勢太神宮御材木之帳』内に木綿関連の記述が多数みられることから、尾張国の少なくとも西北部では慶長七年時点で既に主要綿作地であった可能性が高いことが判明した。つま

り、同冊子は現存最古の尾州西北部における国産木綿関係史料と評価できよう。恐らく、同年時点での木綿関連の贈答品は高級品であると思われるため、それらを選択した四名（さらには彼らと同列に記された「さうねん」や「喜中」といった岩倉住人も）は有力者であると判断できる。したがって、『伊勢太神宮御材木之帳』内にみえる無姓者は必ずしも経済面や身分面等で低い存在であるとは限らないのであり、それ故に、同冊子には榎倉修理家の有力檀那が多数記載されている可能性さえも浮上する。

このように、尾張の檀那からは木綿関連品や米麦、また紙類、さらに金属製品といった物納品が多く確認できる。特に貨幣（銭・銀）での奉賛も散見され、取引銭貨には「あくせん」も確認できるが、これは慶長期までの尾張国内での悪銭検出の初事例と評価できる。そのため、改めて同国を含めた東海地域の貨幣史の問題として取り上げる予定であるため詳細な検討は別稿に譲りたい。⁽³⁰⁾

以上までの検討により、『伊勢太神宮御材木之帳』の記載内容は概ね明らかにになったと考える。

次に、同冊子内にみえる主な地名について、慶長期、特に松平忠吉期段階での榎倉修理家の檀那（所）を空間的に把握するために図版5を作成してみると、神明太一宮が造営されている伊勢町、すなわち中市場を軸として同心円状に、造営用材の寄進元（☆印）と、確認された檀那の住所（○印）は概ね一致ないし、近接する傾向が見て取れる。⁽³¹⁾

慶長七年五月吉日付『伊勢太神宮御材木之帳』について

また、それらの檀那所は五条川や鎌倉街道（岩倉街道）に近接する場合が多いため、恐らくは榎倉修理家の廻檀活動は、それら交通路を活用して展開されていた可能性が高い。

さらに、一定の纏まりで集中する同家の主要檀那所から離れた檀那所が若干存在していることも見逃せない。何故ならば、これらの点在する檀那所の大半が、清須や小牧といった軍事拠点であるからである（図版6参照）。

つまりそれは、榎倉修理家を媒介とした松平忠吉領内における伊勢信仰の普及については、いわば神明太一宮の氏子圏内という近地域間の人的ネットワークによる展開を基軸としつつも、それと同時に遠距離的には軍事拠点を繋ぐ人的ネットワークにより展開していた可能性をも示しているのである。⁽³²⁾

四 まとめにかえて——『伊勢太神宮御材木之帳』の伝来と真宗の〈神祇不帰依〉問題

前章までの検討から、『伊勢太神宮御材木之帳』が慶長七年（一六〇二）時点での御師榎倉（修理）家の檀那所における社会経済的活動の実態がわかる貴重な冊子史料であることは、明らかにになったと考える。しかし、同冊子の記載内容等は複雑であるため、本稿で解明できたことは僅かであり、推定部分も多くなった点は否めない。その主要因として、

十七世紀初頭までの榎倉（修理）家関係史料、とりわけ神明太一宮関連史料が非常に限られていることがある。

では、どうして『伊勢太神宮御材木之帳』は、いわば書誌学の業界でしばしば使われる用語である（天下の孤本）的な存在として、神明太一宮、すなわち神明太一社側に今日まで伝来しているのか。最後にこの点について私見を述べることで本稿を擲筆したい。

実は、慶長期までの神明太一宮関係史料の不足についての問題は、既に江戸後期の段階で発生していた印象を受ける。『誠意録』をみる限り、それは寛政二年（一七九〇）時点で同冊子内でも引用・紹介される史料が大変少ないことから窺えることである。

そもそも、榎倉武幹が『誠意録』を執筆した動機には、神明太一宮の社殿再建問題があり、彼は再建実現という目標に向かって少ない関連史料を収集・編纂する動きを展開した。その際、再建に関連して様々な（由緒文書³³）が作成されるが、『伊勢太神宮御材木之帳』は同宮創建に直接関わる造営用材寄進帳という史料的人格上、それらの由緒・言説に一定の（史的エビデンス）を与える根本ツールとして使われた形跡が読み取れる。恐らく、武幹が社殿再建の史的意義を力説する上で重要な史的エビデンスとなり得る存在は、松平忠吉の朱印状と、忠吉や小笠原吉次の棟札以外ではほぼ『伊勢太神宮御材木之帳』しかなく、だからこそ、同冊子は半ば由緒を証明する根源的存在として大切に取扱われ、それ故に散逸せずに今日まで残存したのであらう。

榎倉武幹が神明太一宮再興関連の史料を作成した背景には、例えば『誠意録』に「我元祖武孝一字ヲ営ミ老後武奉ヲ引テ隠居セシ時高向村半分奥州棚倉小笠原家ヨリ給ル所ノ二百石ノ知行尾張国祈禱所村々半分是ヲ以次男武奉家領トス後故有テ高向村ノ知行所半分ノ所棚倉小笠原家ヨリ給ル知行所譲返シ尾張村々祈禱所持伝ヘ慶長以来当国ヨリ外国々ヘ散在セル大名武家方ヘ御祈禱相納メ猶慶元年々歳々日夜ノ御繁栄ニ從テ御旗本御武家ヘ祈禱ヲ進上シ奉ル御初穂取納ヲ以テ拙家相続セリ然ルニ御国岩倉村近村三拾ヶ村計祈禱所ニ持伝旦所タリシカ岩倉村御宮年々衰微大破ニ及ヒ玉フニ付神感モ薄ク成行殊ニ浄土新宗門跡宗派多端ニシテ我カ神国ニ生レナカラ神明ノ明理ヲ忘浮屠ノ方便ニ迷テ岩倉ノ御宮伊勢両宮并ニ当国大祖之御祈願所タル事ヲ忘失シテ村里之氏神同様ニ成行事悲歎スルニ堪タリ年々神献ノ初穂等ノ收納ノ餘徳ヲ以テ天下泰平国家安穩五穀成就ノ祈禱ヲ修スルニ今納受薄シテ助成ナシ此時再興之志ナカリセハ岩倉ノ御宮不日ニ廃絶セン」とあるように、神明太一宮の社殿の著しい老朽化と、それに伴う岩倉やその周辺での伊勢信仰の受容低下の問題がある。

特に傍線部等から、榎倉修理家が所持する尾張国の檀那所は修理家初代の武孝以来相伝され、最盛期では岩倉村及びその周辺で計三十箇村に及んだが、その後徐々に神明太一宮は衰退し、ついに社殿は大破する有様となった。それに伴い檀家の神明信仰（伊勢信仰）に対する敬神性も希薄になり、特に真宗僧の影響により、神明太一宮が伊勢両宮の神明

社、さらに松平忠吉の祈願所であったことをも忘れ、一般村落の氏神社同然の認識になってしまったと武幹が傷嘆の念を抱いている点が興味を引く。

すなわち、寛政二年頃の岩倉やその周辺では真宗信仰が浸透しつつあり、その結果として伊勢信仰の受容の阻害となっていると彼は認識しているのである。『誠意録』の奥付に「伊勢国度会郡山田住」や「伊勢大廟祠官兼岩倉邑神明祢宜」とみえるように、荒木田姓を有する外宮御師として勢州山田上中之郷町に住みながらも、尾州廻檀時には岩倉の神明太一宮の祢宜としても兼務・同宮奉仕する榎倉武幹にとって、その活動の展開を阻害する存在として特に対抗意識を向けていたのは、真宗勢力であり、地域的にみれば真宗大谷派の寺僧であった可能性が高い。

この事象は、近年、小林准士氏が提唱する〈神祇不帰依〉という近世後期の浄土真宗の宗風の議論⁽²⁴⁾と非常に親和性の高い問題であるが、現時点では尾張国における神祇不帰依論的研究は確認できない。

ともあれ、現代まで『伊勢太神宮御材木之帳』が適切に伝来した理由を考える上で、近世由緒論的研究を今後より一層深めていかねばならないが、その際、神祇不帰依論の視点も考慮する必要がある。

従来、中近世における真宗信仰と神祇信仰、とりわけ伊勢信仰との接点に関する研究については少なく、特に御師関係史料を活用した研究は非常に限られている⁽²⁵⁾。御師を含む伊勢神宮勢力は浄土真宗勢力とどのような関係であったのか、今後より具体的に突き詰めていかねばならない

が、『伊勢太神宮御材木之帳』をはじめとした神明太一宮関係史料はその意味においても貴重な存在なのである。

【付記】

本稿執筆に際し、特に神明太一社宮司吉田稔様及び岩倉市教育委員会の皆様は格別の御協力を得た。記して深謝申し上げたい。なお、本研究には、筆者が研究代表者となる二〇二二年度文部科学省科学研究費基盤研究C「日本初の紙幣「山田羽書」誕生の地《伊勢神宮地域》をめぐる中近世社会経済史の再構築」(JSPS科研費JP22K01603 研究代表者千枝大志)の助成を受けた成果の一部が含まれている。

【翻刻】

凡例

- 一、翻刻にあたり、漢字等を適宜通行体に改めた。
- 一、原文書の形態を可能な限り再現し翻刻することに努めたが、印刷等の都合により、変更した箇所もある。
- 一、各丁の終わりを「」で示し、また()を用いて丁数等の補足情報を適宜施した。
- 一、虫損等により内容が不明な箇所については、「」で示した。また、(カ)を用いて内容を推定した箇所がある。
- 一、虫損等でも、筆跡の一部から推定した箇所は、「ツ」のように「」

内に判読した文字を記し、さらに『慶長七年自十一月神明太一宮御由緒并二伊勢神宮荒木田神主履歴書』所収の書写本（抜書）で補った箇所は、「ツ」のように「」内に判読した文字を記した。

一、行論の都合上、解題部分に対応した黒丸数字（①②）を適宜施した。

一、近代以降の貼紙等の翻刻は省略した。

（表表紙）

慶長七年五月吉日 榎倉修理進

伊勢太神宮御材木之帳

岩倉郷

（表表紙見返し ※白紙）
（1丁表）

一本

上野村

一本

石仏

一本

加納

満庭

一本

三洲 井上

一本

八剣 塚越

同

曾本

二本

岩倉郷 惣中

一本

長瀬村 大円寺
小木市場

一本

大地村 川井村

（1丁裏）

（2丁表）

(2丁裏)

一本

北嶋村 野江

さわ山之分

わた七百めあり
かす一ツ

はな 二百めあり

一本

曾野 羽年

二百文

さくの ❶

太山寺 いなり

三匁

中村加兵へ殿 ❶

一本

長桜 小々所

白物 一ツ

のし 一〔わ〕

やすら ならせ

(3丁表)

かたひら二ツ
三貫文

井野右近さま ❶

大のし 二わ

一本

郡 左右郷

かたひら二ツ
三貫文

御上さま ❶

白物 五ツ

(3丁裏)

ふの〔り〕

岩倉下市は

はしめてたんな也

柴田又十〔郎〕殿

一貫文

御つほねさま ❶

白物 三ツ

式百文

水野善二郎〔殿〕

のし 一わ

(4丁表)

もめん 十七たん あり

五百文

今村小兵へ殿 ❶

かつを 二連

布 五たん あり

のし 一わ

慶長七年五月吉日付『伊勢太神宮御材木之帳』について

同御内方へ ①

白物 一ツ

(5丁表)

藤右衛門 ①

かつを 三連

五郎右衛門 ①

弥右衛門 ①

あし右衛門殿 ①

かつを 二〔連〕

三うら十左衛門殿 ①

のし 一わ

八郎四郎 ①

与右衛門 ① 三文め

源大夫殿 ①

のし 一わ

かつを 二連

次郎右衛門 ①

儀左衛門 ①

かつを 一〔連〕

三うら五ん大夫殿 ①

かつを 一連

かのつめ殿 ①

かつを 一連

浅野加兵衛次殿 ① 「」んは

(6丁裏)

山中 水野 ①

かつを 一連

与次殿 ①

かくてん ひこ三殿 ①

(5丁裏)

二百文

与一郎殿 ①

一連

二貫文

助左衛門 ①

一連

兵五さま 井野かもん殿 ①

のし 二〔わ〕

三匁

長蔵 ①

一連

つしや殿 ① かつを 三連

一匁

又兵へ殿 ①

一連

太郎助殿 ① 一連

(7丁表)

三匁

下代

ひこ助殿 ①

かつを 二連

岩倉下市は

米九斗 たる

七左衛門殿 ①

かつを 二連

米壺斗

六月十七日

同 与次郎殿

(7丁裏)

与九郎 ① 二両

六右衛門 ① 物一たん

たん原与五兵へ殿 ①

のし 一わ

「」なかたな

岩倉

ひはし

かちや

わた

きうねん

はな

二郎右衛門 ②

はな

喜右衛門 ②

わた

孫右衛門 ②

わた

喜中

わた

喜左衛門 ②

わた

なかせ 次右衛門

わた

とかり ひこ三

もめん 一たん

小き市 助左衛門尉

布

長二郎

もめん

おひくに

はな

重衛門

はな

助市郎

(8丁表)

六月十五日

下ゆりつか知行人 銀子拾匁可被進之由候

式匁 伝三郎 平右衛門

二百文 三右衛門

二百 長右衛門

わた 五郎右衛門

慶長七年五月吉日付『伊勢太神宮御材木之帳』について

岩倉

弥助殿

わた

かミの 久助殿

布一たん

かミの 平左衛門

わた

かミの 助藏殿

はな 一袋

米

青山

式斗 六月六日 とらのとし

茂大夫殿

(8丁裏)

小ま木にしのしも也

岩倉衆

一斗 小右衛門尉

柴山五郎左衛門尉

一斗 与九郎

米三斗 小河新左衛門

三升 甚左衛門尉

中河助右衛門

三升 宗市

五升 長助

とらのとし

とらのとし

六月十三日

六月十二日

六月十七日

岩倉市

はつほ

米壺斗

井上三四郎殿

わた金三百五十匁有

料足合四貫文有 此内

壹貫二百文あくせん

もめん十一たん 布二たん有

此内五十三文ひき申候

銀子式匁五分

ほうちやうかい申候

麦八斗六升にて

布三たんかい申候

もめん 一たん

かちやしき

〔9丁表〕

米貳斗 同百文 六月十三日 とらのとし

三郎右衛門尉ニかし申候

麦五升

下市は
二郎助

六月十二日

貳百文 たる 秋米にて進之候

大円寺 彦左衛門尉殿

もめん 一たん

小木市 九郎二郎殿

下場（下市場） 宗八郎

麦五升
かミ 二ツ
百文

せいけん

もめん 一たん

はつを

〔10丁表〕

きよす

もめん 一たん

長助

貳百文
もめん 一たん

同（むすめ）
八郎左衛門

又八殿
小まき孫右衛門尉とりつき

同布 一たん

麦三斗三升

わた 三ツ

大嶋

いしほとけ衆

同布 二たん

麦五斗二升かい申候

もめん 一たん

久蔵

満左とりつき

〔9丁裏〕

岩倉

百文
わきさし 一ツ

半書記とりつき

もめん 一たん

新兵衛殿

もめん

のいり

貳百文

四郎左衛門殿

百文

同
同小川殿

二百文

二郎左衛門殿

もめん

小川殿

二百文

又三郎殿

もめん

四郎右衛門尉とりつき

二百文

勝八殿

〔「」百文

かうり 喜兵衛殿

もめん 一たん

川井より

〔「〕

〔

(10
丁裏)

「」文

かうり はかりや
おくち 弥三殿

(裏表紙
※白紙)

はな

「」石ほとけ
久七殿

上野村
小作殿

「」ミ一そく たんな

岩倉こんや
平十郎殿

布「」たん

てんたう

わた

はた中
喜右衛門

小麦 七升

二人

かミ^(かみカ) 一面

まんは与吉殿

小麦二斗

あつら

かゝミ 一面 とし十九さい也

午年廿一也御立願候 北嶋

(11
丁表)

米五升

岩倉

助左衛門尉殿

麦五升

下市場

小助殿

はなはつを

まんわ

与吉殿

百文

もんいち

もめん一たん

御てんとう ちかういん

麦五斗

熊莊

久市さい

わた

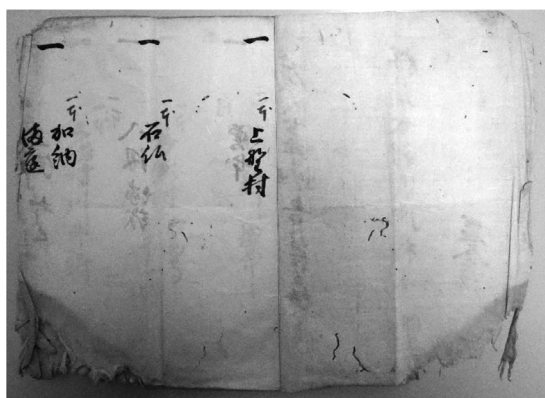
大しま殿

「」十疋

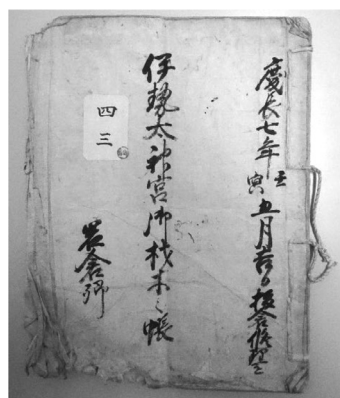
かくてん

与吉殿

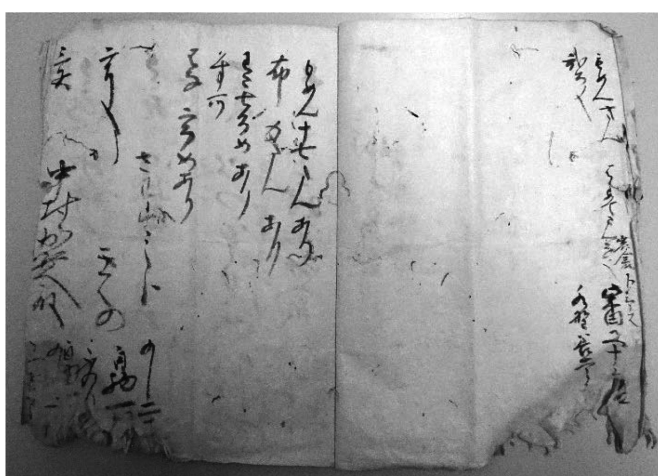
慶長七年五月吉日付『伊勢太神宮御材木之帳』について



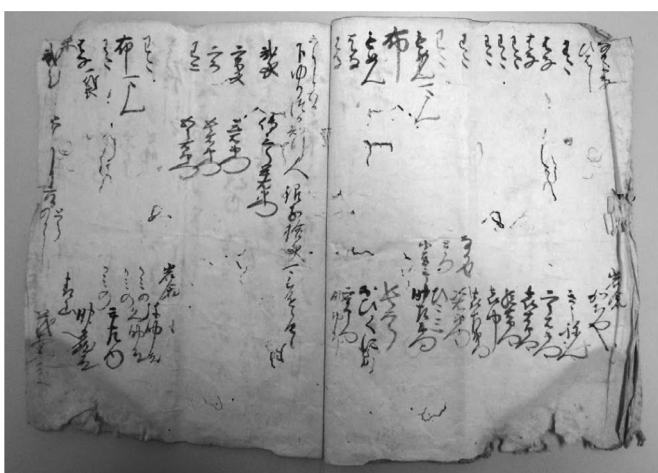
図版 2 『伊勢太神宮御材木之帳』写真
(表表紙見返し～1丁表)



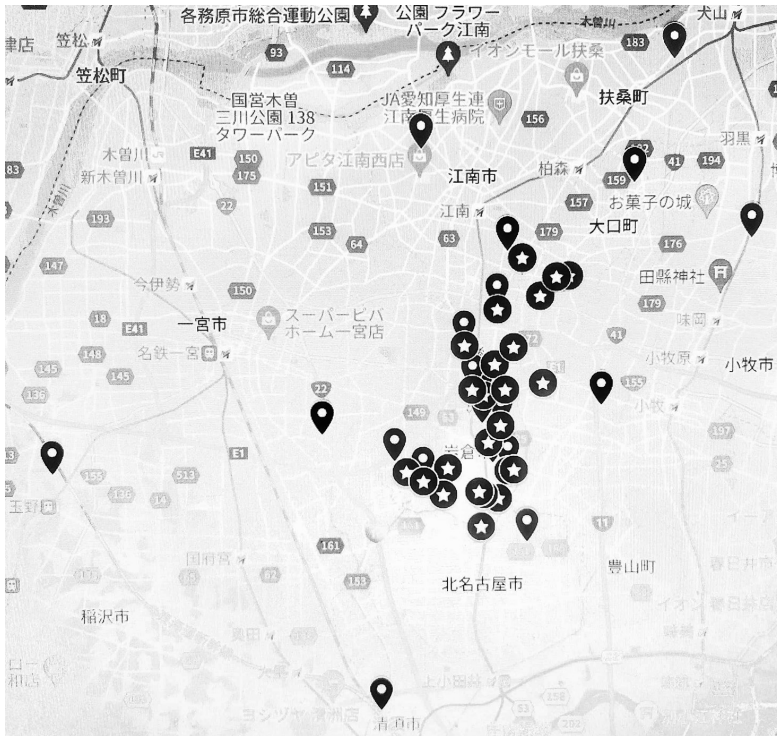
図版 1 『伊勢太神宮御材木之帳』写真 (表表紙)



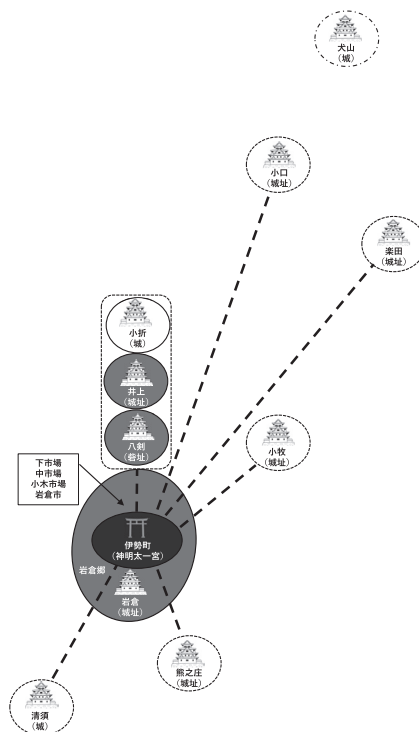
図版 3 『伊勢太神宮御材木之帳』写真 (3丁裏～4丁表)



図版 4 『伊勢太神宮御材木之帳』写真 (7丁裏～8丁表)



図版5 『伊勢太神宮御材木之帳』にみえる地名の主要比定地
※Googleマップをもとに作成



図版6 松平忠吉期の尾州における岩倉を軸とした御師榎倉修理家の信仰ネットワーク図
※楕円形は主要ネットワーク地域を示す。色が濃くて (色付きの楕円形は岩倉郷内であることを示す)、実線である楕円形であるほどネットワークが強いことを表している。

- (1) 『伊勢太神宮御材木之帳』は縦二八・九種×横二二・六種の計十一丁からなる豎帳の形態の冊子であり(吉田稔氏蔵)、『岩倉市・文化財の概要』(岩倉市 二〇〇一年)では「中本町神明大一社宮司吉田家文書」という一括史料群に含まれるとされる。なお、同冊子の写真の一部は図版(1-4)として本稿六四頁に掲載した。
 - (2) この『誠意録』も「中本町神明大一社宮司吉田家文書」なる一括史料群(吉田稔氏蔵)に含まれると思われる。
 - (3) 御師については、『伊勢市史 第二巻 中世編』伊勢市二〇一一年)、『伊勢市史 第三巻 近世編』(伊勢市二〇一三年)、谷戸佑紀『近世前期神宮御師の基礎的研究』(岩田書院 二〇一八年)を参照。
 - (4) 御師の檀那所関連の冊子史料に関する近年の中近世移行期までの主要研究については、京丹後市史編さん委員会編『丹後国御檀家帳』(京丹後市役所二〇一三年)、久田松和則『伊勢御師と旦那―伊勢信仰と開拓者たち―』(弘文堂二〇〇四年)、同『長崎の伊勢信仰―御師をめぐる伊勢と西肥前とのネットワーク―』(長崎文獻社二〇一八年)、佐賀県立図書館編『佐賀県近世史料第十編第五巻』(佐賀県立図書館二〇一七年)、鈴木敦子『戦国期の流通と地域社会』(同成社二〇一一年)、田中健二・唐木裕志・橋詰茂『天文二十年(一五五二)相模国 讃岐国旦那帳(卷子)』(白米家文書 について)、『香川大学教育学部研究報告 第一部』一三九二〇一三年、拙稿『中世末・近世初期の伊勢御師に関する一考察―外宮御師宮後三頭大夫の越前国における活動を中心に―』(上野秀治編『近世の伊勢神宮と地域社会』岩田書院二〇一五年)、拙稿『十六・十七世紀伊勢神宮地域をめぐる信用と金融の実像』(中島圭一編『日本の中世貨幣と東アジア』勉誠出版二〇二二年)を参照。
 - (5) 榎倉家については、西山克『道者と地下人―中世末期の伊勢―』(吉川弘文館 一九八七年)、拙稿『独自の勢力を築いた山田三方と伊勢神宮』(『歴史読本 二〇一三年号』中経出版 二〇一三年)を参照。
 - (6) 新修名古屋市史編集委員会編『第五章 中世の熱田と地域文化 第五節 名古屋地域の信仰』・第六章 戦国の争乱と尾張 第三節 今川那古野氏』(『新修名古屋市史 第二巻』名古屋市 一九九八年)、
 - (7) 愛知県史編さん委員会編『第四章 戦国・織豊期の寺社と信仰 第三節 神祇信仰の展開』(『愛知県史 通史編三 中世二・織豊』愛知県 二〇一八年)等を参照。
 - (8) 岩倉町史編さん委員会編の『岩倉町史』(一九五五年 愛知県丹羽郡岩倉町)では、『第四章 中世の岩倉 第五節 岩倉の町並と市場』・第八章 神社と寺院 一 神社(神明大一社)。また、岩倉市史編集委員会編の『岩倉市史』(岩倉市 一九八五年)では、上巻の「第八編 中世 第三章 中世の宗教と社会 第一節 神社信仰と村落」・「第八編 中世 第五章 地名と集落 第一節 近世以前の地名と集落」・「第九編 近世 第一章 幕藩体制の成立 第一節 尾張の藩政」・下巻では「第九編 宗教 第一章 神社 第二節 地域の神社」において「伊勢太神宮御材木之帳」を含む「中本町神明大一社宮司吉田家文書」が利用されている。
 - (9) 『岩倉市・文化財の概要』の「中本町神明大一社宮司吉田家文書」の解説を参考に、『伊勢太神宮御材木之帳』に記載のある尾州内の主要地名が現在の愛知県のどの市町名に該当するかを考えると、主として県西北部(岩倉市・江南市・一宮市・大口町・清須市・小牧市・大山市・北名古屋市)の地名に相当すると思われる。
 - (10) 皇學館大学史料編纂所編『神宮御師資料―外宮篇四』(皇學館大学出版部 一九八六年)所収。
 - (11) 『岩倉市史』下巻でもこの朱印状に関する考察があるが、ここにみえる榎倉修理進を『神明宮御由緒留』にみえる榎周右衛門武房に人物比定されている。しかし、私見では武房はその当時に実在した人物とは認めがたいため(榎周右衛門なる名乗りも榎倉修理進に擬えて後世に創作したのではあるまいか)、本稿では実在が確認できる榎倉武孝とした。
 - (12) 『岩倉市史』下巻では、「慶長七年(一六〇二)神社周辺の伊勢町(上市場・中市場・下市場の総称)が朱印地とされた」(一七六頁)とあり、神明大一社の周りの市場地名の総称とされている。従うべき見解だろう。
- 『岩倉市史』下巻には両棟札の表側の写真が掲載(一七七頁)され、

さらに翻刻文は表裏面のいずれも存在している（二七八頁）。

(13) 『三重県史 資料編 中世1（下）』（三重県 一九九九年）所収『輯古帖』四—二号文書。

(14) 『三重県史 資料編 中世1（下）』所収『輯古帖』四—三号文書。

(15) 『三重県史 資料編 中世3（上）』（三重県 二〇一七年）所収『榎倉文書』一号文書。

(16) 『三重県史 資料編 中世3（上）』所収『榎倉文書』二号文書。なお、『誠意録』には、本稿紹介分を含む『榎倉文書』所収の古文書写が掲載されている。

(17) 本稿では国立国会図書館デジタルコレクション版を利用した。

(18) 『正徳御師名帳』（朝倉泰一郎『伊勢の神宮と国民』（株式会社水鳥印刷所 一九七五年）六二頁）及び、『諸家師職名録』（架蔵『大神宮故事類纂 雑載部 三十三私祈禱檀家』（朝倉泰一郎旧蔵書写本）所収）、さらに『安永六年外宮師職諸国巨家方家数改覚』から判断した。なお、その後も松田長大夫家と井伊掃部頭家との師檀関係は途切れることなく、例えば、慶応三年（一八六七）の『公儀 諸大名方江両方合御祓納候御師』（皇學館大学史料編纂所編『神宮御師資料六』皇學館大学出版部 一九八八年）でも確認できるように幕末維新期まで継続したと思われる。

(19) 御師の檀那所における廻檀活動の実像が判明する（御祓賦帳）なる檀那名簿は、十六世紀から十七世紀初頭の時点で一定の記載様式があったことが現存する複数の（御祓賦帳）から窺える。すなわち、（御祓賦帳）には、表紙に、①作成年月日をはじめ、②檀那所を冠した「御祓賦帳」や「道者日記」といった表題名、③作成主体者名（＝廻檀を担当した御師やその代官）等の情報、本文に、④檀那所名、⑤檀那名（居住地・身分・立場等）、⑥配布品（御祓大麻・伊勢土産等）、⑦奉賛品（代価等）（初穂料・神楽料・神馬料・御供料・為替使用等）の情報が記され、それらが基本的な記述構成といえる。このように（御祓賦帳）は、檀那（所）の実態把握を主眼に記されているわけだが、記述構成面で例外的な冊子も若干存在する。例えば、天正十八年（一五九〇）と同二十年に荒木田氏親が著した『南北勢神領取立日記』は、

(20)

内宮権祢宜荒木田氏親の御師としての活動、すなわち氏親の廻檀活動が記された（御祓賦帳）である一方、彼が勢州鈴鹿地方担当の内宮領代官であった関係で、同宮上分米の収取・運送等の（引付日記）の機能も有する（稲本紀昭『天正十八年同廿年南北勢神領取立日記』について）（『史窓』五一（一九九四年））。また、永禄八（一五六五）年に岡田大夫が著した『さぬきの道者一円日記』なる（御祓賦帳）は、岡田家の檀那所としての讃州の檀那、さらに泉州の檀那が記され、冊子末には同家の泉州堺等での金融記事も存在し、（大福帳）的な機能も帯びた冊子である（拙稿『十六・十七世紀伊勢神宮地域をめぐる信用と金融の実像』）。『伊勢太神宮御材木之帳』も、鬘斗鮑や白物（伊勢産の白粉か）といった伊勢土産が記載されているため、（御祓賦帳）に類似する記載内容も含まれるものの、全く御祓大麻の記載が存在せず、また、御祓賦帳にみられる各種の信仰的サービス料に関する記載は初穂料が若干散見できるだけである。さらに神明太一宮造営金品寄進帳」と評価するのが相応しい史料といえる。

(21) 『岩倉市史』といった岩倉市域を扱う地域史研究では、「さわ山之分」からはじまる記載部分についての考察は割愛されている。そのみならず、岩倉市域外の記述についてもほとんど言及されていない。このように『伊勢太神宮御材木之帳』の活用はあくまでも岩倉市域内の歴史の叙述のみに留まっていた。そのために、同冊子は、様々な分野での史料価値がある稀有な存在にも関わらず従来は史料価値が埋没されていたのである。

なお、計二十二箇所のほか、詳細不明な地名を計二箇所（下ゆりつか・青山）検出している。これらについては、人名といったように地名ではない可能性がある。また、岩倉市については、岩倉内で下市場・小木市・中市場といった複数の市場地名が慶長十三年（一六〇八）までの榎倉家尾州関係史料に確認できるためそれらの総称か、中市場を含むいずれかの別称の可能性もある。そのため岩倉市を除外すると地名は計二十一箇所となるが、岩倉市イコール中市場の理解に立つと計二十二箇所となる。

- (22) 近年の岩倉城及び城下町岩倉の研究については、鈴木正貴「都市開発史としての尾張の守護所」(仁木宏・鈴木正貴編『天下人信長の基礎構造』高志書院 二〇二一年)等を参照。
- (23) 近年の小牧山城及び城下町小牧の研究については、小野友記子「織田信長と小牧山―城と町の空間構造と政権構想―」(仁木宏・鈴木正貴編『天下人信長の基礎構造』高志書院 二〇二一年)等を参照。
- (24) 近年の清須城及び城下町清須の研究については、鈴木正貴「都市開発史としての尾張の守護所」等を参照。
- (25) 小川殿は小河新左衛門と同一人物の可能性もあるため、それを除くと計十一名となる。
- (26) 但し、居住地を姓から判断した者はその名乗りが姓ではなく地名である場合は無姓者の可能性もある。
- (27) 拙著『中近世伊勢神宮地域の貨幣と商業組織』(岩田書院二〇二一年)を参照。
- (28) 『誠意録』では、この文書は「当宮附之田慶長十三申年百姓古券」として紹介され、「此田所屋鋪ハ神境界南ト西ノ壹段九畝之當時宮守祿宜取納セル所ノ田所ナルヘシ」と解説されている。
- (29) 永原慶二「苧麻・絹・木綿の社会史」(吉川弘文館 二〇〇四年)を参照。
- (30) 中近世移行期までの尾州における錢貨流通については、拙稿「十六世紀後半―十七世紀初頭の尾州津島の錢貨流通に関するノート」(日本史料研究会編『日本史のまめめししい知識 第一巻』日本史料研究会 二〇一六年)を参照。
- (31) 本稿では、おおまかな檀那(所)の分布傾向を空間的に把握することのみを意図しているため図版5における各比定地のポイントには推定地名の表示は行っていない。
- (32) 参考までに、松平忠吉期の神明太一宮を軸とする尾州西北部における御師榎倉修理家の信仰のネットワーク構造を概念化した図を六五頁に掲載した(図版6)。「伊勢太神宮御材木之帳」にみられる主な地名のうち、それが軍事拠点(武家拠点)であるか否かを判別する際、本稿で引用した各種の自治体史及び論文集をはじめ、『名古屋市博物館企画展 城からのぞむ 尾張の戦国時代』(名古屋市博物館 二〇〇七年)等の展覧会図録、さらに『大口町埋蔵文化財調査報告書 第八集 小口城跡範囲確認発掘調査報告書』(大口町教育委員会 二〇一二年)といった文化財調査報告書等を適宜参照した。なお、〈軍事拠点〉と御師との問題については、御師の動向を含めた伊勢神宮関連事項との関係性を中近世移行期までの伊勢国と越前国を主たる事例地域に〈人的ネットワーク〉の視点から報告したことがある。拙稿「武家拠点と伊勢神宮関連事項をめぐって」(「武家拠点科研」事務局編『武家拠点科研』福井研究集会 資料集 越前における武家拠点の形成と変容 16―17世紀を中心にして)(二〇二一年)を参照。
- (33) 〈由緒文書〉については、柳澤誠「由緒文書の作成・書写・相伝」(坂田聡編『古文書の伝来と歴史の創造―由緒論から読み解く山国文書の世界―』高志書院 二〇二〇年)を参照。神明太一宮の造営には伊勢神宮側が禁止する飛神明類似の領内勸化行為が伴ったため、伊勢神宮と紛争になり、それに関係する由緒文書も多く現存し、その一部が翻刻等の形で内容が紹介されている(中本町神明太一社宮司吉田家文書)。「岩倉市・文化財の概要」、大西源一「大神宮史要」(平凡社一九六〇年)、愛知県史編さん委員会編「第十一章 寺院と神社 第一節 尾張藩制下の神社」・「史料群解説 神明太一社文書」(「愛知県史 資料編 一六 近世二尾西・尾北」愛知県 二〇〇六年)、同編「第八章 神社と信仰 第三節 権力と神社」(「愛知県史 通史編 四 近世一」愛知県 二〇一九年)、大野春光「神明宮御由緒留」解説(二)「『岩倉郷土研究』九 二〇〇五年」、同「神明宮御由緒留」解説(二)「『岩倉郷土研究』一〇 二〇〇七年」、同「神明太一社創建の歴史―『神明宮御由緒留』現代語訳―」(「岩倉郷土研究」十一 二〇一七年)。しかし、『神明宮御由緒留』なる由緒文書にみえる文禄四年(一五九五)頃から活躍したとされる榎周右衛門武房と彼が活躍したという由緒に関しては岩倉地域史研究的には高い評価がなされているものの、現時点では武房の存在を含めて疑念を抱かざるを得ない部分が少ない。そのため、本稿では、『神明宮御由緒留』ではなく、『伊勢太神宮御材木之帳』等の原文書といった信憑性の高い史料を用いて史的考証を行った上で由緒を叙述している。「誠意録」を軸に行論

した。

(34) 小林准士『日本近世の宗教秩序―浄土真宗の宗旨をめぐる紛争―』（塙

書房 二〇二二年）を参照。

(35) 既に筆者は、戦国期を事例に御師側からみた真宗勢力との接点を若干

指摘したことがある。すなわち、「三重県総合博物館所蔵『谷家文書』

所収の伊勢御師道者売券について―中世紀州の宗教的（熊野・高野

山・真宗）特質と伊勢御師の活動―」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』

三八号 二〇一九年）では、紀州における御師の檀家の真宗門徒化

の警戒意識、前掲の「武家拠点と伊勢神宮関連事項をめぐって」で

は勢州の多気や丹生で活動する御師と本願寺坊官家である下間兵庫

助（源七郎）等との交流について言及した。